



SF妙法蓮華經

石川英輔

SF妙法蓮華經

講談社

著者紹介

昭和八年、京都生まれ。東京都立石神井高校卒。国際基督教大学と東京都立大学理学部中退。現在、ミカ製版株式会社取締役、武蔵野美術大学講師。カラー写真製版技術の研究により日本印刷学会第一回技術賞を受賞（昭和五十一年）。著書に「SF西遊記」「SF水滸伝」「SF三国志」「大江戸神仙伝」「大江戸仙境録」などがある。

SF 妙法蓮華經

定価 一四〇〇円（本体一三五九円）

著者 石川英輔

一九八九年八月三十日 第一刷発行

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社講談社



東京都文京区音羽二一十二—二十一 郵便番号 一一二
電話 (〇三) 九四五—一一一 (大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

© Eisuke Ishikawa 1989 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本
についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部あてにお願
いいたします。

S F
妙法蓮華經——目次

序章 7

燃える世界(一) 22

(二) 35

(三) 39

(四) 56

火宅のたとえ 74

月のかなた 90

スペースコロニー 106

天界の楽園 119

めぐみの意見 133

衣裏繫珠のたとえ 147

天と地と 160

雪暮村(一) 177

(二) 192

三草二木と星のたとえ 209

左利夫の午後 219

化城のたとえ 233

魂と物理学 243

長者窮子のたとえ
261

逃げない女
271

輝く時空船
282

良医のたとえ
296

大北出張所
306

終章
321

あとがき
326

S
F
妙法蓮華經

序章

まだ、太陽は昇らない。

熱帯のインドでも二月の早朝は爽やかだった。

釈尊は、王舎城外にそびえる岩山、聖なる靈鷲山りやうじゆの第三峰で、いつものように深い瞑想に入っておられた。その前では、合掌した数百人もの弟子、修行者や信者たちが、瞑目された師の御顔を仰ぎ見ていた。夜明け前のほの暗い闇の中で、ブッダ世尊の御姿だけが莊嚴な金色の光に包まれて浮かび上がっている。

なぜ尊い師の御姿だけがいつも光明に包まれて見えるのか、よく考えようと不思議なことなのだが、弟子たちにとつてはあまりに長い間見慣れた光景なので、それが超自然的な現象なのか、単に自分たちの心理的な投影に過ぎないのか、今ではだれも考えよ

うとさえしなくなっていた。師の御姿が輝いているのは、弟子たちにとつて自然現象の一部になり切っていたのである。

それにしても、今日は、師を包む光がこれまでにないほど強く、ほとんど輝いているように見えると、古くからの弟子たちは感じていた。

列席しているのは、信者も出家もともに修行を積んだ弟子たちばかりだった。釈尊の指導のもとで偉大なる光明への道を求め続けてきたこれらの弟子たちの多くは、肉眼に見えぬ異世界の神々が師を取り囲んで賛美している様子を心の目ではつきりと見ることさえ出来た。正しい修行を行つて五感が冴えわたると、高い次元の感覚が生まれるのは、釈尊の弟子たちにとつては常識だった。そして、偉大な師の近くにいた時は、その感覚がさらに増強されて、日常経験をはるかに超越した境地を味わうことさえできるのだ。

今朝は、心眼に映る神々の数がこれまでとは比べものにならないほど多いようだと言ふ弟子たちは感じていた。

——今日は、いつもと何かが違う——

知恵第一といわれる高弟の長老シャーリプトラは、そう思いながら師を仰いでいた。シャーリプトラほど靈能力が高くなれば、心眼も肉眼も区別がつかないほどはつきりと異世界の存在を見ることができる。シャーリプトラは、師の周囲の空間に満ちている神々ばかりか、時間・空間を越えて集まってきた聖者たちの姿まではつきり見ていた。

釈尊は、七十歳を過ぎた高齢の人とは思えぬほど、がっしりした若々しい体つきをしておられた。五十歳以上の人さえ珍しい古代に、八十歳まで生きられた頑健さは想像にあまるものがある。

弟子たちにとっての釈尊は、単に心の師というだけでなく、心身ともに人間を超越した存在、まさに生ける超越者、ブツダ世尊にほかならなかったのである。

夜明けが近づいてきた。師とともにいる法悦の時は、いつでも風のように素早く過ぎ去って行く。

東の空が白むにつれて、師を包む輝きはさらに大きくなった。そして、シャーリプトラの心眼には、

これまで見たこともないほど大勢の異世界のブツダたちや神々、それに無数の修行者や菩薩、聖者たちが虚空から湧き出すように現われ、灯火を慕って集まる虫さながらに、師の周囲に群がる様子がはつきりと映った。

大いなる師の教えを受けるようになってから、すでに数十年になるが、今日の様子は祭礼の日が普段の日と違う以上に、これまでとまったく違っていた。

——何かが起きようとしている——

心の中でそうつぶやいたシャーリプトラは、肉眼を閉じて自在な心の目だけで尊い師の御姿を見詰めた。

過去の世に大いなる悟りに達した多くのブツダたちが、師を取り囲んで美しい言葉でほめ讃え、ブラフマン（梵天）とインドラ（帝釈）を中心とした数え切れぬほど多くの神々や天人たちも、天空に連なって釈尊の限らない徳を賛美している。シャーリプトラは、その姿を見ることができればかりか、いしれぬ美しい響きの声や、天人の奏でる音楽を聞く

ことさえてきるのであった。

釈尊が法を説かれようとする時、その周囲に集まる異世界のブツダや神々が心眼に映ずるのは高い次元の感覚を身につけた弟子たちにとって珍しいことではない。だが、これほど多くのブツダや神々が群がるようにして師を賛美するのを見るのは、はじめの経験だった。

確かに、何かかつてなかったことが起きようとしている……シャーリプトラは、そう直感した。

東の空が、ひとときわ明るくなり、合掌する弟子たちの姿も闇の底から浮かび上がった。

釈尊の御姿は、さらに輝きを増した。

やがて、太陽の上縁が東の山の端に一つの点のように現われ、一筋の光芒が一段高い場所に座つておられる師の御姿を正面から照らした。

「おお……」

声にもならないどよめきが、弟子たちの間に広がった。シャーリプトラは、思わず息を呑んで肉眼をも見開いた。

釈尊の額が、太陽そのもののような強い光を放ち

始めたのである。師の御姿が光り輝くのには慣れている弟子たちも、この不思議な光景にはただ目を見張るばかりだった。

釈尊の教えには、超自然的な部分はない。数十年の間お傍に仕えていた侍者のアーナンダでさえ、師が奇跡を行われるのを見たことがないのだ。といつても、釈尊の教えによつて奇跡のように救われた者がいないわけではない。

それどころか、無数の生きとし生けるものが、聖なる教えによつて心身ともに救われて来た。多くのものが、福德を得たばかりではなく、重い病が目の前で癒えた例さえ数えきれないほど見て来た。釈尊の教えを信じるものに授かる功德がはかり知れないことは、誰でも知っている。

だが、それは、正しい努力を正しく行うことによつて得られた救いであつて、けつして無から有を生じるたぐいの奇跡ではないと信じられていた。たとえ、一見したところでは偉大な聖者の不思議な靈力によつて行われた奇跡のように見えることであつても、その因果関係を師によつて説明されると、すべ

て自然の理法に従った結果だということがはつきりと理解できるのだった。

長い期間にわたってそういう考え方に慣らされて来た弟子たちは、奇跡としか表現のしようのないこの現象を見て戸惑った。

——何か、深い意味のあることに違いない——
シャーリプトラはそう思ったが、深い瞑想に入っておられる師に質問するわけにはいかない。

心の中では驚きながらも、じつと眺めている弟子たちの目の前で、さらに驚くべきことが起こった。

輝いている釈尊の額がさらに強い光を放ち、その光芒は折しも東の空に昇り始めた太陽よりも強く東方を照らしたのである。光は天地に満ちあふれ、これまでにはシャーリプトラの心眼でさえ見ることできなかったさまざまな世界のさまざまな姿がくつきりと浮かび上がって来た。すべての弟子たちは、輝かしい光の中にこれまでに見たことのない世界を見て、目を見張った。

インドは、亜大陸と呼ばれるだけあって、氷雪のヒマラヤから酷熱の平原、あるいは緑濃い爽やかな

高原から熱帯の海まで、氷の大海以外のあらゆる地理的環境が揃っている。もちろん、そこには多くの種族とさまざまな階級の人々が、千変万化の生活をいとむ世界がある。

師とともに、あるいは自分独りで、広い世界を歩き廻ったことのある出家の修行者たち、あるいは在俗の信者たちは、この時代としてはもつとも広い世界を知る人々でもあった。

だが、今ここで師の額から発する神秘的な光に照らし出されたさまざまな世界には、広い世界を知っている修行者や信者たちでさえ想像さえしたことのない珍しい風俗の人々ばかりか、あきらかに人間とは思えない奇怪な生きものたちの姿さえ見えた。

ある世界では、魚のように水の中に住む異形（いぎよう）の者たちがいた。

ある世界では、飴のような物質でできた生きものたちが、地面を流れるように動いていた。

ある世界では、金属質の動物が金属質の植物の間にうごめいていた。

そのほかにも、数限りない不思議な世界での不思議

議な生活が、輝かしい光芒の中にまざまざと映し出されていた。

そのような異世界の光景を数限りなく見せられて、シャーリプトラの頭はすぐに飽和してしまつた。いずれも、シャーリプトラの知識と経験をもつてしても理解の外にあり、共感を覚えたり感情移入をしたりできる対象ではあり得なかつたからだ。

しかし、判断能力の限界を越えた情報量を与えられてゐるうちに、シャーリプトラは無数の世界の中から次第に自分の理解できる世界だけを選びだして見るようになっていた。

ある世界では、人間によく似た姿の者たちが、奇妙な形の家で家族とともに複雑な社会生活をいとなんでいた。

ある世界では、紛うかたなき人間だが見慣れない服装の者たちが、鋭い刀を振り回して殺し合つていた。

また、ある世界では、山のように巨大な建物の中で複雑な道具に埋もれるようにして日を送つていた。

——何と不思議な暮しがあるものだろうか——

シャーリプトラは心の中で感嘆の声を上げたものの、たとえ相手が人間であつてもあまりに異質な生活にはそれ以上の共感を覚えなかつた。だが、次に見た修行者らしい男の姿には思わず心を引きつけられた。

それは、明らかに自分たちと同じインドの修行者で、どこか静かな山の中で瞑想に耽つてゐる様子だつた。シャーリプトラは、その男に精神を集中した。すぐに相手の心が伝わつて来た。自分自身とほぼ同質の心だつたので、その内容は容易に理解できた。意外なことに、それは五百年も後の世に生きてゐる修行者だつた。

しかも、驚いたことに、この男はこれからこの靈鷲山で起こることを非常に大きな期待を込めてじつと見守つてゐる。肉眼は閉じてゐるのだが、心眼は大きく見開かれて釈尊の御姿をじつと見詰めていた。五百年も先の未来の世にしながら、釈尊の御前に聴聞に現われる信仰の厚さと神秘的な能力に、シャーリプトラは大きな感動を覚えた。

また別の修行者が見えた。さらに遠く千七百年も
の未来に生きて、釈尊の開かれた道を極めようとし
ている僧らしかった。粗末な僧衣を着て地面に座り
合掌している。その背後には鋭利な大刀を振りかざ
した武士が突つ立っていた。もはや日は暮れている
らしく、あたりを照らすかがり火が刃に映えて恐ろ
しげに光っていた。どうやら、この修行者は首を切
られようとしているらしかったが、心の奥を見通し
てもほんの僅かの恐怖も不安も感じ取ることができ
なかった。

その修行者は、心眼だけではなく大きな肉眼をか
つと見開いて、じつと釈尊を見詰めていた。大いな
る師に対する絶対的な信仰心で、その目は燃え立っ
ていた。シャーリプトラは、はるかな時空を超越す
る強烈な霊的能力に圧倒されそうになりながら、深
い尊敬の心を込めて合掌した。

武士が、大声で気合をかけながら刀を振り下ろし
た。シャーリプトラは、思わず肉眼を閉じようとし
た。だが、刀が修行者の体に触れる前に、何か固い
物体に当るような音が聞こえた。鍛え上げた剛刀

は、その衝撃で二カ所から折れて飛び散った。修行
者はまるで大地に根を下ろしたように微動だにせ
ず、釈尊から目をそらそうともしなかった。

シャーリプトラは、世尊とこの修行者の間に何か
想像を絶する神秘的な交流が行われたのを感じてい
た。偉大な師は、遠い未来の世に生きる修行者をお
護りになったのだ。

これは、長らく釈尊にお仕えして来た間に一度も
見たことのない種類の奇跡だった。

はるかな未来に生まれるはずの二人の後輩の僧に
心が通うことがわかると、シャーリプトラの心眼は
いよいよ冴えわたり、これまで理解できなかった異
世界の不思議な生活に対して心が開くようになって
来た。

無数の世界のうち、ただの一つとして同じ様相は
ないのだが、じつと見詰めているうちに、天と地ほ
ども違う世界であっても、そこを支配しているの
は、師がつねに教えたまう宇宙の法則であることが
わかる。

しばらくこの様子を眺めていたシャーリプトラ

は、やがて、世尊の左側の虚空に浮かぶマンジュシュリー（文殊）菩薩に向うと、修行者や信者を代表して尋ねた。

「マンジュシュリー菩薩よ。私どもは、世尊にお仕えて数十年にもなりますが、このような現象をただの一度も見ることがございませぬ。いったい、これは何を意味するのでございましょうか」

大弟子中で知恵第一と讃えられているシャーリプトラにも、今朝の超自然的現象を説明することはできなかつた。だが、マンジュシュリーが過去の世に現われた多くのブツダに仕えたことのある菩薩であることは知っていたので、この不思議についても知識があるはずだと思つたからだ。

「シャーリプトラよ」

釈尊に従う大菩薩のうちで、知識と知恵を象徴しているマンジュシュリーは、頷いて答えた。

「私のこれまでの経験では、いづこの世界でもブツダが大いなる宇宙の実体とまことの原理について説こうとされる直前には、必ずこのような奇瑞（きず）を現わされる。恐らく、世尊はこれから、大いなる宇宙の

実体を理解するための道を説かれるのであろう」

「大いなる宇宙の実体とまことの原理……」

シャーリプトラは、絶句した。今これから説かれるのがまことの原理であるとすれば、これまでに受けた教えはいったい何だったというのだらう。シャーリプトラも多くの弟子たちも、これまでの教えによつてすでに心を惑わされることのない境地に達していると思つていただけに、マンジュシュリー菩薩の言葉はあまりに意外だった。

その氣持を察したマンジュシュリーは、すぐにいった。

「案ずることはない。シャーリプトラよ。道を求める心がある限り、世尊は必ずその心を充足させて下さる。

ブツダ世尊のなさることに誤りはあり得ない。そして、御心は限りなく広いからだ」

シャーリプトラがほつとして頷いた時、偉大なる師は瞑想を終えて目を開かれた。いつの間にか、太陽は高く昇っていた。弟子たちは、厳かな面持（おもてもち）で師を仰いだ。

気のせいか、シャーリプトラは、釈尊がいつもより厳しい表情でおられるように感じたが、それでも、師の眼差は限らない慈愛に満ちていた。

「尊師よ」

シャーリプトラは、弟子たちを代表して質問した。

「長い間、おそばにお仕えして参りました間にも、このように不思議な経験を致したことはございませんぬ。」

世尊よ。今お見せ下さっているさまざまな世界、さまざまな人々は、ただの幻とも思えませぬ。何ゆえにあのような世界が現われたのでございましょうか」

「弟子たちよ」

釈尊は、おもむろに口を開き、朗々たる御声でお答えになった。

「今そなたたちが見ているのは、過去、現在、未来にこの宇宙にかつて存在した、または現在存在している、あるいは未来に存在するはずの数多くの世界と、そこに住む人々のほんの一部分にすぎない。」

私は、時間と空間を越えてあのような多くの世界へ行き、生きとし生ける者に救いの道を示していたのだ。今朝は、私の想念の力があまりに強かったため、そなたたちにも感じ取ることができたのであるう」

「世尊よ」

シャーリプトラは、重ねて質問した。

「このような多くの世界で、世尊はいったいどのような教えを説かれて救いの道を示されるのでございましょうか」

釈尊は、おもむろに頷かれた。

「私が今説いていたのは、妙法蓮華經という至高の教えである」

「尊師が、三千世界の迷える者たちに幸福への道である真理を説かれたのは、今朝がはじめてではございませんまい。」

それなのに、何ゆえに今朝に限ってこのような不思議を見ることができたのでございましょうか」

「私が今説いていた妙法蓮華經こそが、大いなる宇宙の実体へ通じる最高の法であり、まことの解放、